

傷ついても愛

菊村 到

Itaru Kikumura



FRANK K. CORREY



傷ついて愛

定価〓九八〇円

著者〓菊村 到

昭和五十七年三月二十日 第一刷発行

発行者〓三木 章

発行所〓株式会社講談社

東京都文京区音羽二―十二―二十一 郵便番号一―二

電話(〇三)九四五―一―一一(大代表) 振替東京八―三九三〇

印刷所〓豊国印刷株式会社

製本所〓株式会社大進堂

© ITARU KIKUMURA 1982 Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

ISBN 4-06-130832-7 (文2)

目次

傷	5
イヤリング	46
遠い過去から	79
肌さびしくて	121
花のいのち	166
暗い陶醉	202
旅立ちの歌	228

装帧
川村麻子

傷
つ
い
て
愛

傷

地下鉄の階段をあがって、地上に出ると、夕暮れの空があった。

地上に出た瞬間、眼に入ってくる空の色には、どこか新鮮な輝きがある。

五時を少しまわっているのに、街には、まだ午後の明るさが残っている。冬のあいだは、この時刻、地下鉄から地上に出ると、街はすでに夜の気配につつまれていたものだ。

いま、美佐子の頭上に広がる夕暮れの空の明るさは、もう冬がすっかり遠のいたことを示していた。

アキバ鍼灸センターは、その地下鉄の駅から歩いて五分たらずのところにある。

牧田美佐子は、週に一度、アキバ鍼灸センターに通っている。冬の初めから、通いはじめたのである。

アキバ鍼灸センターは五階建てのビルの三階にある。美佐子は、毎週金曜日の夕方、そこで院長の秋葉静江にハリを打ってもらう。

初めてアキバに行った時、美佐子は、いわゆるハリ医

というもののイメージとは全く違うムードに驚かされた。

清潔で、明るくて、病院というよりもレクリエーション・センターという感じなのだ。たえず、バック・グラウンド・ミュージックがやわらかく流れているし、サウナ風呂もあって、サウナのあと、マッサージをしてもらって帰る、というひとたちも多い。

美佐子が、ここに通いはじめたのは、主としてやせるためである。それほど、ふとっているわけではないが、よりスマートになりたいという女心からなのである。

やせるためには特に耳に小さなハリをうめこむのだが、これをやると、食欲がおさえられるようで、よいなものは食べたくなる。食べなければ、やせるわけで、美佐子の場合、たしかにそれなりの効果はあがっている。

院長の秋葉静江は、恐らく四十歳はこえているのだろうが、年齢不詳という感じで、なかなかの美貌の持ち主である。

すらりとした肢体を清潔な白衣につつまれた秋葉静江は、ハリ医というよりも、女医というふうで、それも精神分析医を思わせるふんいきを持っている。彼女は、ハリを打ちながら、患者の気持ちをもみほぐすように、いろいろおしゃべりをする。美佐子にとっては、それも楽

しみの一つなのだった。

秋葉静江は、患者の悩みごとの相談なんかにも乗ってくれるのである。

治療をおわって、外に出た時、さすがに街はもう暗くなっていた。ハリを打ったあとの軽いうずきが、快い疲労感のなかに溶けこんでいる。それは、どこか性的な陶酔に似たところがある。

横断歩道を渡るうとして、美佐子は、おやと思った。道の向こう側を歩いている男が、夫の牧田公介に似ていたからである。

若い女がすぐうしろを歩いている。その男が夫であるかどうか、正確には分からないし、若い女がその男の連れなのかどうか、はつきりしない。

牧田美佐子が足を踏みだそうとした時、青信号が点滅しはじめた。

走って渡れば、渡れないことはなかった。一瞬、ためらった。

結局、思いとどまった。青信号の点滅する横断歩道を走って渡るなどということは、三十六歳の人妻のすることではない、という気持ちに彼女がブレーキをかけたようである。

それに、走ったりして、ハリを打ったあとの快いけるさをこわしては、つまらないという心理も作用した。

その男が夫の牧田公介で、そしてすぐうしろを歩いていた若い女が彼の連れであったとしても、それがどうだというのだろう、という気持ちもあった。

信号は赤に変わり、眼の前を車が流れはじめた。

もう一度、青になり、美佐子は渡った。しかし、もう夫に似た男も若い女も、夜のくらがりのなかに溶けこんでしまっていた。

牧田公介は、映画人、という映画雑誌の編集長をしている。

同時に彼は、映画評論家として新聞や雑誌、あるいはテレビなどでも活躍している。

最近の映画界は不況である。当然、映画雑誌の経営状態もかなり苦しい。しかし、映画人は、ある不動産会社の社長が、半分、道楽ではじめた雑誌だから、余り利益があがらなくても、なんとかやっていけるのである。

牧田公介と美佐子は結婚して十一年になるが、二人のあいだに子供はいない。

その夜、牧田は午前一時ごろ帰宅した。

マンション暮らしで、キーは、それぞれが持っている。牧田の帰りが遅い時は、美佐子は先に寝てしまう。寝室は一つだが、ベッドは二つ、離れて置いている。ホテルのツイン・ベッドの部屋に似ている。

美佐子は、熟睡している時など、朝、目をさますまで、牧田がいつ帰ってきたのか、全く気付かないこともある。

しかし、その夜は、どういうわけか、美佐子は妙に神経がたかぶって、なかなか寝つかれなかった。

やはり、ちらと見かけた牧田に似た男と若い女のこと、意識のどこかにひっかかっているのかもしれないかった。

それで、美佐子は風呂に入った。彼女は、ハリを打ちにいく前に入浴したから、この日は二度目ということになる。

ぬるめの湯に裸身をひたしている時に、牧田が帰ってきた。

「なんだ、まだ起きてたのかい」

浴室をのぞいて、そう声をかけたあと、しばらくして、

「お邪魔しますよ」

と言いながら入ってきた。

「随分、ひさしぶりね。一しよに入浴するなんて」

美佐子は湯船の中で体をちぢめるようにした。

マンションにしては浴室のスペースは広くとってあって、湯船も大きめである。

二人一しよに入っても、それほど、きゅうくつではな

い。

「ねえ、私、かなりスマートになったでしょう」

美佐子は少し甘えるように言った。

「そうかな」

牧田は、なんだか気のない返事をした。

「全く関心がないって感じね」

「いまさら、女房のヌードを見たってはいじまらない。しかし、なるほど、そう言われてみれば、少し、やせたかもね。でも、きみはもともと、それほどふとってたわけじゃないし。ハリは、ずっと続けてるのかい」

アキバ鍼灸センターの存在を、美佐子に教えたのは、牧田なのである。

アキバには芸能人なんかも、出入りしていて、牧田がどこからか、聞きこんできて、

「ウェイト・コントロールには、ハリがいいそうだよ」

と美佐子にすすめたのである。

「ハリって言えば、きょう、アキバの帰りに、あなたに似たひとを見かけたわ」

「おれに似たひと？」

牧田は、ちょっと表情をひきしめるようにした。

「夕方、あのへんを歩いてなかった？」

「それは、おれじゃない」

牧田は両手で湯をすくって、顔を洗った。

表情を隠すためのしぐさ、と取れないこともない。

「そのひと、若い女性と一しょだったみたい」

「若い女？　ますます、おれじゃないよ」

「そうかなあ。あれ、やつぱり、あんただったんじゃないかな」

「おれじゃない。本人が言うんだから、間違いないさ」

牧田は、にこりともしないで言った。

「じゃあ、そういうことにしときましよう。でも、男って、一たん、外に出ると、何やってるか、分からないからなあ」

「そんなこと、言うなら、女だって同じさ。亭主が出かけたあと、何をやってるか、分かりやしない」

「それもそうね」

二人は声を合わせて笑った。

風呂から出たあと、二人はそれぞれのベッドに入った。

「ねえ、そっちへ行ってもいい？」

美佐子は、声をひそめるようにして言った。

返事がくるまでに、少し時間がかかった。

「ああ」

あくびをかみ殺したような声だった。

美佐子は自分のベッドから下りると、夫のベッドに体をすべりこませた。

牧田の腕が待ちかまえていたように伸びて、美佐子の体を抱き寄せる、ということとはなかった。

牧田は眼を閉じたまま、じっとしている。

昔は、こんなふうではなかったのに、と美佐子は思った。

美佐子が肌をすりよせていっても、このごろ、牧田は以前のように、やさしく抱きしめてはくれない。夫の態度がそんなふうに変わってきたのは、一体、いつからなのだろうか。

それについてのはっきりした記憶はない。

といって、特に美佐子がそばにくるのを嫌っているわけではなさそうなのだ。つめたくなった、というのとも少し違うようである。愛情がさめた、というふうにも思えない。

そのへんの感じが、ちょっと微妙なのである。ただ、昔のようなほげしい情熱や愛撫の濃密さといったものは失われている。

少なくとも、だいぶ薄れてきている。

それを物足らなく思うのは、女のどんらんさなのだろうか。

からだの交渉も、このところ、間遠になってきている。これは、愛情そのものとは関係がないことなのかもしれない。

結婚して、歳月がたてば、当然、愛情の私たちも変わってくるはずである。いつまでも、新婚時代のような甘く熱い情感の波立ちが続くわけのものではない。

からだのつながりが間違になったとしても、それは当然の成り行きで、愛情がさめたといって、夫を責めるのは、見当違いなのだろう。

しかし、女としては、やはり寂しい。

同じベッドにからだを横たえたからといって、必ずしも性のつながりを求めているわけではない。

ただ、やさしくそっと抱きしめてくれるだけでいいのである。夫の体温や静かな息遣いを、じかに肌で受けとめていられれば、それで妻の心は安らぐのである。

しかし、今の牧田は何もしないでいる。

眼をつむったまま、じっとしている。無言のままだ。妻のからだに対して無感動になっている、というふうである。

「ねえ」

美佐子は甘えるように言い、足をそっとからませた。

牧田は眼をあけた。その眼は、どこか、うつろな感じだった。

「このごろ、あなた、少し疲れてるみたい」

「忙しすぎるんだよ。働きざかりと言えば、聞こえはいが、会社から一番こき使われる年代なんだ。うちに帰

ると、くたくたでね、泥のように眠るだけさ」

牧田の手が伸びて、軽く美佐子の肩にふれた。しかし、抱き寄せようとする気配はない。ただ、申しわけにそうしただけという感じである。

美佐子のほうは、今夜は何となく甘えたい気分になっている。それが牧田に分からないわけではないのだから、牧田のほうにはそんな彼女を受け入れて、やさしくつつみこもうとする姿勢は見られない。

牧田の眼は、ふたたび閉じられた。

美佐子は、自分の心がこわばるのをおぼえた。

牧田が疲れているらしいことは、本のだが、それがどこまで仕事のせいなのかどうかは分からない。

男にとっては、酒を飲むのも、マージャンをするのも、ゴルフも旅行も、すべて仕事のうちらしい。

仕事という言葉くらい、男にとって都合のいい口実はない。

仕事という隠れみの下で、何をやっているのか、分かりはしない。

牧田は、静かな寝息を立てはじめた。

美佐子は、静かな寝息を立てはじめた。自分の肩からはずすと、ベッドを下りた。自分のベッドに戻った。

からだの奥のほうで何かがささくれ立っているような感じである。はげしいいらだちが、美佐子をとらえてき

た。

妻をそんな状態におきざりにしたまま、牧田は、いかにも気持ちよさそうに寢息を立てている。

美佐子は眼をつむったが、なかなか寝つかれそうもない。

夕暮れの街で、ちらりと見かけた牧田に似た男のことが、ごく自然に意識の上に浮かびあがってくる。あれは、やっぱり牧田だったのではないだろうか。そして、そのすぐあとを歩いていたら若い女は、牧田の連れであつたに違いない。

もつとも、そうだったとしても、美佐子が特に神経をとがらせることもないはずだった。牧田は、映画雑誌の編集長なのだから、仕事の上で芸能人たちとの接触も多い。

芸能人と限らず、若い女性と接する機会は多いだろう。

牧田が若い女と歩いていたとしても、不思議はない。とやかく言うほうが、おかしい。

理屈では、たしかにその通りなのだが、感情のほう、なつとくしてくれない。

今夜、もし、牧田が美佐子のからだをやさしく抱きしめ、甘い愛撫でもみほぐしてくれていたなら、夕暮れの街で見かけた光景など、あとかたもなく、彼女の意識から

消えていたに違いない。そして、安らかな眠りの中に溶けこむことができただろう。

からだのつながりが、間遠になったのは、ひよつとしたら、牧田に愛人でもできたせいかもしれない。しかし、牧田に限って、そんなことはない、と思う気持ちも、はたらいっている。

美佐子は、あしたの朝は、食事の仕度なんかしてやるもんか、と思った。

明け方近くになって、やっと眠りにひきこまれた。眼がさめた時は、もう七時をまわっていた。

牧田のベッドは、からっぽである。

起きてみると、牧田の姿はどこにも見当たらない。出かけてしまったらしい。

美佐子は何となく胸さわぎに似たものをおぼえた。

その日、一日中、美佐子は気持ちがおちつかなかった。

前の晩、朝食の仕度なんかしてやるもんか、と思つたくせに、自分が眠っている間に、夫が会社に出かけていったことが分かると、へんに不安になつてくる。

車を運転するひとが事故を起こすのは、前日や当日に夫婦げんかをしたり、家庭に何かトラブルがあったりした時に多い、というようなことを、美佐子は前に新聞か雑誌で読んだことがある。

牧田は会社へマイ・カーで行くわけではないし、昨夜、夫婦げんかをしたのでもない。

しかし、自分が朝食の仕度もせずに眠りこんでいた、ということが牧田にあたえた心理的な影響を思うと、彼女の心は重たくふさがってくる。

どうやら牧田は、紙バック入りの牛乳を飲んだだけで、出かけたらしい。

牧田だって、勝手なことをしているのだから、たまにはこれくらいのは、してやったほうがいい薬になる、と考へて、自分になつとくさせようとするのだが、やっぱり気持ちがおちつかない。

と言つても、何も貞淑な妻ぶっているわけではない。なんとなく気持ちがすっきりしないのである。

あるいは、これは単なる習慣の問題なのかもしれない。一日の行動の流れの中で、どこかでひとつ、手順が狂ってしまった時の軽い不快感や不安に近いものなのかもしれない。

そんなに気になるのなら、会社に電話をして、牧田に一言、あやまれば、それで済むはずなのだが、そういう気にはなれない。

牧田にあやまつたりするのは、いやなのである。いづれにしても、この不安定な心理状態はきょう一日でおわるはずだった。夜、牧田が無事な姿を見せてくれ

れば、それですんでしまうはずのものだった。

あるいは、牧田が文句を並べたて、美佐子がこれに応戦して、冷戦状態はエスカレートするかもしれないが、それはそうなった時のことだ。

その電話が、かかってきたのは夜の十一時ごろのことだった。

かけてきたのは、牧田の部下の大石邦雄だった。大石は、映画人の副編集長をしている。

「じつは、牧田さんが、ちょっとけがをしましてね」

大石はそう言った。

「けがと言いますと、交通事故ですか」

美佐子は眼の前が、暗く沈むのをおぼえた。

「いや、交通事故じゃないんです。ただ、ころんで頭を打ちましてね。それで今、病院に入ったところなんです」

大石の言葉にはどこことなく歯切れの悪さが感じられた。

「けがは、どの程度なんでしょうか」

美佐子は、自分の内側ではげしく波立つものに耐えながら聞いた。

「大したことはないと思います。あまりご心配なさいませんように。牧田さんも、とても元気ですから」

大石は、そう言ったが、美佐子に心配をかけまいとし

て、ことさら軽いように言っているというふうでもある。

「とにかく、これからすぐ、そちらにうかがいます」

美佐子は病院の場所や電話番号をメモして、電話を切った。

電話を切ってから、大石に一言もお礼を言わなかったことに気が付いた。

やはり、気持ちが悪転していたせいだろう。

何日くらい入院することになるのか、それを確かめることも忘れていた。それによって、下着その他、持つていくものについても考えなければならぬ。

しかし、本当は、非常な重傷で、生命もあやぶまれているというような状態であるのかもしれない。

大石さんは、私にショックをあたえないために、ああいう言い方をしたのではないかしら。そんなことを思うと、美佐子は苦しくて息が詰まりそうになってくる。

こんなことになったのも、けさ、ちゃんと起きて、朝食の仕度をしてあげなかったせいなのだ。

美佐子は、とりあえず下着やパジャマなどをポストンバッグに詰めこんだ。

着替えにとりかかろうとしている時、電話が鳴った。いやな予感をおぼえた。

送受器をとった。

「大石です。たびたびすみません。まだ、お出かけにならなかったんですね。よかったです。じつは、この病院は救急病院ではないものですから、夜は玄関をしめちゃうんです。それに傷も大したことありませんから、今夜はおいで下さらなくても、よろしいそうです」

「牧田がそう言ってるんですか」

「はい。軽いけがで入院したから、今夜は帰れない、そう奥さんに伝えてくれればいい、ということでした」
そんなふうに言われて、美佐子は奇妙な感じをおぼえた。

傷は軽いから心配するな、というのは分かるけれども、何だか、これでは美佐子が病院に行くのを迷惑がつている、というふうにも取れないことはない。

「分かりました。では、あした、うかがいます」

電話を切ってから、また大石にお礼を言うのを忘れたことに気付き、心の中で舌打ちをした。

目黒区祐天寺の上原医院。

牧田公介はそこに入院しているのである。

大石の話では、ころんで頭を打ったのだという。なぜ、祐天寺なんかで、ころんだりしたのかしら――。

牧田がころんで頭を打った、その場所は、恐らく病院からそう遠くは離れていないだろう。

祐天寺あたりでころんだとすると、どうしてそんなと

ころに夜遅く行っていたのだろうか。

銀座とか新宿、あるいは赤坂、六本木のあたり、というのなら、分かる。

少し飲みすぎて、足もとが多少、おぼつかなくなっていれば、ころぶこともあり得るだろう。

それが祐天寺となると、ちょっと分からない。もっとも、編集者という仕事の性質上、原稿を依頼する相手や取材先によって、どんなところへも出かけることになる。

相手が祐天寺に住んでいれば、夜おそくにそこに訪ねていくことも、充分あり得るわけだ。お酒を出されて、いい気分になり、帰りに足をふみはずして、ひっくり返るといふことも考えられる。

どこでころぼうが、すべろうが、何も美佐子が気をまわすことはないのである。

そうは思うのだが、やっぱり気になる。

それは、きのうの夕方、アキバ鍼灸センターの近くで見かけた牧田に似た人物のせいなのかもしれない。

それに上原医院という病院も、何となく気にかかる。

名前から推すと、小さな個人病院なのだろう。大石は、救急病院ではないから、夜は玄関がしまっていると言った。

玄関がしまっているようなところへ、どうして入院し

たのかしら。

それに、考えてみると、ころんで頭を打った、というの、何となく妙な気がする。

浴室で足を踏みすべらせて、よろめいた拍子に浴槽のふちに頭をたたきつけたり、胸を打ちつけて、肋骨を折ったり、というような話は聞いたことがあるが、牧田は、一体どういう状況でころんだのだろうか。

そう考えて、美佐子は、ざくりとした。

大石から、ころんだ、と聞かされた時、美佐子はほとんど反射的に路上での事故というふうを受けとつていた。

酔って、ふらついて歩いていて、何かにつまづいて転倒し、どこかに頭をぶつけた、と勝手に想像してしまつたのである。

大石はその状況については、それ以上、説明しようとはしなかった。その時の大石の語調に美佐子は何となく齒切れの悪さを感じたものだ。

大石がくわしく話さなかったのは、何か具合の悪い事情があるからなのではないかしら。

ころんだ、というの、ひよつとしたら、浴室の中、ということも考えられる。そんなふうに想像をめぐらしているうちに、美佐子は今夜もまた眠れなくなってしまった。

今までこんなふうに夫に対して疑惑の目を向けたことはなかった。なぜ、こんなふうになるのか、自分でもふしぎだった。

美佐子は今まで夫の牧田の行動に対して疑惑を持ったことは、全くないわけではない。

なんとなく怪しいな、と思ったことは、何度かある。

牧田が結婚以来、美佐子以外の女性の肌には一度もふれずにすごしてきた、とは、とても信じられない。

妻の眼を盗んで、適当に浮気くらいは楽しんでるに違いないと思う。

しかし、そのことで美佐子は深刻に思い悩んだことはない。男というものは、女とは生理的にも心理的にも、かなり異なった生きものらしいから、多少の遊びはしかたがない、という気持ちだった。

それに、もし牧田が浮気をしたとしても、それによって家庭が破壊されたり、夫婦の愛情に危機がおとずれる、というようなことはないだろうという安心感もあった。

その安心感は、きわめて漠然としたものであって、特に根拠があるわけではなかったが、美佐子の心が不安で揺れ動くということはなかった。

美佐子は、そういう夫に対する漠然とした信頼に支えられていたのである。

その信頼が、今、なんとなく揺らぎはじめたというふうなのだ。

なぜ、そんなふうに揺らぎはじめたのか。それは、美佐子自身にも、よく分からなかった。

愛情の危機というものは、こんなふうに、日常生活のちよつとしたすきまから、ある日、思いがけない形で、こっそり忍びこんでくるものなのかもしれないから。

翌日の午後、美佐子は上原医院に出かけた。

美佐子のマンションは、世田谷区の桜新町にある。祐天寺に出るには、タクシーを利用すれば、一番、簡単だが、それほど急ぐわけでもないのにタクシーに乗るのは、いかにも不経済である。

地下鉄で渋谷に出て、渋谷から東横線に乗るというコースがよさそうだが、それだと、一度渋谷に出てから、また戻るといふ感じになる。

それほど急ぐ必要はない、といつても、夫がけがをして入院しているのに、お金をけちちつて、電車で遠回りして行く、というの、ちよつと気がひける。

それで地下鉄を三軒茶屋で降りて、あとはタクシーで行くことにした。これなら、タクシー代も安くなるし、時間も節約できる。

着いてみると、上原医院は思ったよりも、大きな建物だった。